

西真寺通信

令和三年秋号発行 西真寺

御礼と感謝

総代責任役員 塚田 進

総代責任役員を努めております
塚田です。御門徒の皆様には、西真
寺護持の為、常日頃「ご支援とご協力
を賜り、厚く御礼を申し上げます。

例えば、前御住職（西照院釋長弘
行年八十五歳）が平成二十八年五月
二十九日と前坊守奥様（玲玉院釋弘
真 行年八十五歳）が、同年六月七
日に相次いで浄土往生し、私たち門
徒一同は、驚きと悲しみに暮れてお
りました。

私の長い人生の中で、お二人の合
同葬儀を挙行しなければならなか
ったことは、総代責任役員として一
番大きな出来事でした。

前御住職には、西真寺を継承する
跡継ぎがいなかった為、二度ばかり
京都西本願寺（縁・事務所）に相談
に行きましたが、なかなか良縁に恵
まれませんでした。しかし、阿弥陀
様は西真寺を見捨てることはしま
せんでした。

平成二十八年一月十二日に現御
住職が入寺したいと、後継職の申出
があり、同一月二十二日に各総代役
員と面会し、前御住職と前坊守のお
二人と養子縁組が相整い、総代は勿
論のこと門徒一同安心したことが
昨日のように思い出されます。

このご縁を改めて節目にする、現
御住職の住職継職奉告法要と前御
住職、前坊守の七回忌法要につい
て、来年の六月初旬に予定しており
ますので、「ご承知おき下さい。」

さて、私事ですが、六十歳で定
年を迎え、その後福祉施設で四年
間務めた後、退職しました。

仕事も終わり、一段落した安堵
感からか、平成十四年の六月に心
筋梗塞の一步手前で村上病院に入
院しました。その際、四回から五
回心臓が締め付けられ、私の傍ら
には、常に心電図と看護師の姿が
ありました。

その後、新発田病院に転院し、
検査の結果「異型狭心症」と診断
され、今もニトロ舌錠を首にぶら
下げながら生活を送っています。

また、平成二十九年には、村上
病院で胃力メラ検査を受けた結
果、七センチの「食道癌」が見つ
かり、新発田病院に紹介状を書い
てもらい再検査をしましたが、同
じ結果でした。

その時はさすがに、この世との
縁も尽きたなと思い、身辺整理を

始めました。そして、担当医と相談
の結果、切除手術では無く、放射線
治療に切り替えることが出来る
こと。三十三回の放射線治療を行
う為に新発田病院に通院し続けま
した。

その後、運良く食道癌は全て完治
したのです。しかし、三か月に一度、
胃力メラとCTで経過観察をして
いる過程で、平成三十年に再度「右
腎臓細胞癌」が見つかったのです。

放射線治療は出来ない為、腎臓細
胞癌の一部を切除する手術を受け
ました。現在、二つの癌も今のとこ
ろ完治しております。

このように常に病氣と向き合う
過程で、生きている喜びと、家族と
周りの人々に支えられる有難さを
噛みしめております。そして、仏壇
に向かって、南無阿弥陀仏と唱え合
掌し、生かされているこの身今生に
感謝をしている日々を味わわせて
頂いております。

南無阿弥陀仏

「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」6
—親鸞の神祇不拝から学ぶ戦争—

3. 戦う国家と宗教教団の関係 —国家神道について

歴史上、十字軍、叙任権闘争やフランス革命の悲劇から学び、人類が長い年月をかけて探求し、結果生まれた人類の知恵が「政教分離」の原則であり、「信教の自由」であるはずです。欧州で築かれたこの原理は、日本の国家においては、憲法上の原則であります。日本では、古代社会から長い年月の間、政教一致の状態が続いた為、「アメリカに押し付けられた憲法」とする為政者自身が、残念ながら全く理解していないのが実情であります。

中曽根首相

「国家国民は汚辱を捨て栄光を求めて進む」
ヴァイツゼッカー大統領（ドイツ）

「過去に目を閉じる者は現在に盲目である」

私自身も何故国家神道が生まれ、戦争に至ったかという背景や思想、歴史については、その起源を祭政一致の観念を権威づけた古代日本にあることを学びました。その上で「仏教と神道の関係」という課題のもとに歴史心理学の手法を用い、仏教の教義に偏らない方法かつ仏教の教義が分からなくても理解できるように、これ迄説明しておりました。

しかし今回、ご門徒さんとの対話の中で、なぜ浄土真宗は神仏習合として教義を語らないのか？浄土真宗は神道と対立する教義を持っているのか？という問いがありました。

柳田国男は、神道は、死を穢れとして忌み嫌うが、真宗門徒は、死を穢れとして忌まないとはっきり示しています。

日本人はもとよりご門徒さんにも、柳田国男の言葉以上に親鸞の「み教え」は届いていなかった訳です。

そこで、神道と国、そして戦争との関係を明らかにする上で、親鸞の思想を紹介しながら、宗教学や心理学、哲学の視点も援用し、説明して往く必要性を強く感じた訳であります。

4. 親鸞聖人の神祇不拝

連研の話し合い講座で、説明した内容に「神道は請求書のお参り、仏教は領収書のお参り」と、ひろさちやの言葉を借りて、神道と仏教の方向性の違いを説明しました。

そして、親鸞の根本思想である、如来回向について話したところ、全く反応が無く、全員聞いた事もない顔をされていました。この現状を踏まえ、なぜこれほど神仏の問題が、浄土真宗

における連研の課題になっているかについて最初から説明したいと思えます。親鸞聖人の神祇不拝については、

出家のひとの宝は、国王にむかいて礼拝せず。父母にむかいて礼拝せず。六親につかへず、鬼神をらいせず
『菩薩戒経』

仏に帰依せば終にまたその余の諸天神に帰依ざれ
『大般涅槃経』

自ら仏に帰依し、法に帰依し、比丘僧に帰命せよ。余道につかうることをえざれ、天を拝するすることをえざれ、鬼神をまつ祠ることをえざれ、吉良日を視ることをえざれとなり。
優婆夷三昧を学ばんと欲せば

(乃至) 天を拝し神をしほ祀することをえざれとなり『大般涅槃経』(えざれ←する必要のない身となれ・次号に続く)

死刑制度と悪を考える④ 親鸞の悪の捉え方

2. 死刑制度存置論の根本

私たちは、「自分は理性で生きていく」という前提を保持し、悪とは無縁の善人の仮面を外せずに、本当の顔と仮面が乖離している状態にある為、人のいのちの領域まで良い悪しを付け、分別しているのではないのでしょうか。

3. 親鸞と釈尊の悪の捉え方

親鸞の悪人正機の悪人観には、救う者と救われる者との差別的関係性はなく、善悪の二分性もないところに親鸞の思想の画期性が指摘できます。

親鸞の示す煩惱とは、煩惱不浄具足と表現されるように穢悪の意味があります。実際のインドのサンスクリット語では、煩惱のことをクレーシャ (Klesha) と云ふ、「煩惱

の穢れ、悪い心のはたらき」という意味になります。もう一つには「もう一人の私、内なる妨害者」とする意味もあります。

親鸞は、死ぬまでこの煩惱は祓うことはできず、制御不能に陥ることを常に自覚し、この内なる影である「クレーシャ」と生涯を通じて戦う必要があると捉えていました。

影と対話し、向き合う姿勢により、自己中心の生き方から本来の自分の全体性を辿る生き方への転換につながるのです。

内なる影と自己との対話こそ親鸞と釈尊に共通した煩惱に対する相対化を意味します。また、煩惱を滅することは、無我であり、煩惱をコントロールすることと示しています。煩惱の相対化とは、煩惱を自分の一部として認めながら観察して自己を理解する過程を示しています。

煩惱の「滅」は、「ニローダ」抑制」を意味し、釈尊の成道後に悪魔が現れており、悟っても煩惱は、姿を現し、消えないことが分かります。奈良康明は、煩惱が現れば、その都度制御すべきことを仏典が物語っていると指摘しています。

「スッタニパータ」(中村元訳『ブツダのことば—スッタニパータ』1986年岩波文庫)は、歴史上の釈尊のことばに近い最古の聖典であり、釈尊が成道前と成道後に悪魔と話している内容が記されています。その中の四三六、四三七偈には、悪魔の軍隊としての欲望、嫌悪、飢餓、妄執、睡眠、恐怖、疑惑、みせかけと強情や自己欺瞞、驕慢さなど、煩惱について触れている個所もあります。

老松克博によれば、この仏伝の主語は常に釈尊本人だが、「サンユッタ・ニカーヤ」(『ブツダ 悪魔との対話』)では、「如是我聞」

に代わっていることから、悪魔は釈尊の内なる影であり、釈尊は既に自己の視点から影を相対的に捉えていると指摘しています。釈尊は悪について次のように説いています。

悪は私には来ないと言って、悪を軽く見ないように。水滴が落ちて、やがて水の瓶が充たされるように、愚か者は悪を少しずつ積み重ね、やがて悪で充たされる。(ダンマパダ 121 の意訳)

この言葉は、テレビで放映される殺人鬼や悪人を見る側、他人事であり偽善者として傍観する私達に対しての問いかけです。人間は条件次第で、人も殺す心の闇である煩惱を持ち続けている。

私達は、科学の実験やテレビ、ビデオ鑑賞のし過ぎで、悪いことは全て他人事に終始しているのではないのでしょうか。

(次号に続く)

■ 霊魂について 1

霊魂は生まれ変わり、死に変わる実体を指します。「実体は主体である」とは、ヘーゲルの言葉です。しかし、フィヒテは、自己自身を知る「自覚こそが主体である」と語りました。

霊魂とは、身体から独立した主体でありますが、これを真の自己として永遠化することは、実際には自己でないものに対して執着しているだけで、真の目覚めにはならず、自分の亡霊(觀念)にすぎないことをフィヒテは知っていたのです。

釈尊は、霊魂については一言も説いていないにも関わらず、日本では、中国の儒教や道教の影響を受けた諸宗が、霊魂について当たり前のように説いています。

源信は『往生要集』の中で、霊魂の存在は全く語っていません。しかし、念仏結社(二十五三昧念)の綱領には、遺体から霊魂が分離すると説いています。

それは、死と同時に往生する臨終来迎を求めたからです。臨終の際に往生を願う葬儀儀礼では、霊魂が一番民衆に伝わり易い「方便」かもしれませぬ。

確かに釈尊が仏教を説く前の、ヴェーダ教やバラモン教においては、輪廻転生や中有(この世とあの世の間)を説き、その主体は霊魂でした。

しかし、釈尊は、この輪廻転生の流転の苦しみからの解放、苦しみの主体である「我」(アトマン)すなわち霊魂の実体から解脱することを「無我(アナートマン)」と言い、その境地を涅槃と示したのです。

つまり、フィヒテと同様に釈尊も自己の目覚めを主体としていることで、霊魂という実体に執着している「我」||「実体なる主体」にこそ、自己の課題があるとしたからに他なりません。

日本に入ってきた仏教は、教えそのものより、儀礼を重視した中国思想や習俗化された内容が多く、鎮護国家の為の仏教でありました。

その為、仏教の根本思想までもが、権力寄りの慰霊や怨霊思想に沿ったものであることは、仏教史を学べば必ず至る過程であるので、権力者ほど理不尽な殺し方をして、殺された恨みを持つ霊魂を恐れます。

崇りを恐れる人ほど、人格を無視した傾向を持ち合わせたり、悔いの残る理不尽な別れ方をして、心(識)で捉えているのです。

霊魂は、人間の根本にある「恐

れ」が心の眼を通して観える現象です。例えば幽霊は、死んだ人の迷いから浮遊するのではなく、私たちが迷いを抱えているから浮遊するという見方にすぎません。

もし、幽霊(=霊魂)に主体的人格があれば、亡き人と会いたいと願う人が多く、人格が備われば、崇りもなく、尊重できる対象に成るはずですが。

また、本来の仏教ならば、生前にたとえ悪名高い人だったとしても、その人の自己中心的な「我」が無くなり(無我)、仏に成る教えと成るはずですが。故に時の権力者の「恐れ」により、仏教が歪められたことは否めなく、祈祷する高僧ほど権力者に近い存在であったことが理解できます。

さらに詳しく言えば、霊魂を主体とする仏教諸宗では、儒教や道教を仏教の儀礼化に取り入れている過程で、身体と霊魂の二元論に変化してしまったと言えるのです。(次号に続く)